愛知工業大学研究報告
第 2 6号A　平成 3年

論 文

# 19世紀イギリスにおける民衆娯楽の衰退過程

## C.Dickensの諸作品を手がかりとして

# The process of the undermining of traditional recreation in the nineteenth century England

## Through the works of C.Dickens

山　田　岳　志
Takeshi YAMADA

The aim of this study is to make clear the process of undermining traditional recreation in relation to the social structure in the nineteenth century England. Charles Dickens' " Sunday Under Three Heads " is examined here. Literary works have been thought to be a useful means of assessing of sport. Literature makes it possible to analyse contemporary society more realistically than by social science, because it tends to show the time and society more vividly by its free imagination. To explain sport through literature seems to be most suitable approch. From this point of view, the process of the undermining of traditional recreation in the nineteenth century England will be discussed in this paper, mainly concerning Evangelicalism and traditional recreation in the works of Dickens.

## 1.はじめに

本稿の目的は、19世紀イギリスにおける伝統的な民衆娯楽の衰退過程をC. Dickensの諸作品を手がかりとして若干の検討を試みる。ギッシングは、『チャールズ・ディケンズ論』においてC. Dickensこそヴィクトリア朝社会環境の正確無比な表現者であり、しかも彼が最も得意とした描写こそ「イギリス人のある階層 ― 風俗習慣をもつことで有名なある階級」についてであったと指摘する。[1] 本稿でC. Dickensの諸作品を手がかりとする理由も彼の作品の主たるテーマがヴィクトリア朝社会であり、さらには " Sketches by Boz "にみられるような労働者階級の日常生活における写実性にある。

教養部

さて、イギリス近代スポーツの成立過程、それは18世紀後半から19世紀半ばの工業化の過程にかけて伝統的な民主娯楽が産業革命を経て社会のパラダイムが根本的に変化するに伴って要求されてくる近代イギリス社会に合致した人格形成の手段として変革されていく過程でもあったと言えよう。こうしたイギリス近代スポーツの成立過程に視点をおいた従来の研究は産業革命の成功とともに社会的発展をしてきた中流階級の価値体系と同一視する傾向で述べられてきたように思われる。[2]またイギリス研究史が教示してくれるように、19世紀イギリス社会は伝統的ジェントルマン階級の価値意識が最も発揮された時代であり、しかもこの時代が中流階級間においてジェントルマン化意識が最も強調

された時代であると言うのであれば、[3] 19世紀社会において「近代化」の条件を整備したといわれるイギリス近代スポーツの発展はブルジョワ的価値体系と伝統的ジェントルマンの価値体系との弁証法的発展過程として捉えられてきたようにおもわれる。[4] というのもマーカムスンが『英国社会における民衆娯楽』のなかで指摘するように、「近代化」以前のイギリスにおける伝統的な民衆娯楽が日常的な生活様式を転倒させた上に成り立つのを特徴とするものであれば[5] このような伝統的な民衆娯楽がイギリスにおいて近代スポーツとして認知されてくる条件こそは、まさにブルジョワ的価値体系に合致するように修正され発展してくる過程であったろう。[6] また一方においてはT.アーノルド、T.ヒューズ、C.キングズレー等が主張したクリスチャン・ジェントルマンの理念によって支えられた身体活動はまさしく19世紀以降強調されてくる伝統的ジェントルマンの価値体系の中においてであったと思われる。[7] このように19世紀イギリス社会を中流階級の社会的発展過程として捉える一方、かの『帝国主義』を支えかつ『世界の工場』としての繁栄を確保していく過程は、伝統的ジェントルマン教育を基調とした教育制度によってつくりだされた人格形成と歩調を合わせるものであったと思われる。まさに中流階級間において成長するジェントルマン化のエートスを体制内化することによって展開されたそこでの教育内容こそは19世紀イギリス社会の思考・行動の様式を支配するものであったと思われる。この社会的、文化的基準を伴った伝統的ジェントルマンの価値体系こそ、19世紀イギリスにおいて伝統的な民衆娯楽を「近代化」していく上で大きく関与していったと思われる。こうした19世紀の社会的条件こそ伝統的な民衆娯楽をその社会に合致したイデオロギー的性格に変容させていったいったものと思われる。

本稿ではこうしたイギリス近代スポーツの発展過程を踏まえながら、伝統的な民衆娯楽と中流階級との関係を検討していくが、その手がかりとしてC. Dickensの“Sunday Under Three Heads”[8] を中心としながら、19世紀イギリス社会の概観と合わせて彼の伝統的な民衆娯楽に対する態度を追求しながら本テーマへの若干のアプローチを試みる。

## 2. 19世紀における民衆娯楽“Tom Brown's School days”より

17世紀ピューリタニズムの社会道徳=勤労と労働の規律の強化は伝統的な民衆娯楽を解体したばかりか、その支持基盤であった伝統的な共同体社会をも崩壊したと言われる。さて、宗教的祭礼行事と結び付いていた伝統的な民衆娯楽も王政復古から18世紀半ばにかけて、「世俗化」のの傾向を強めていった。こうした工業化以前の伝統的な民衆娯楽の状況について、T.ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』(第二章、「お祭り」)は、「バークシャーの渓の大祭りの能ふる限り公平にして真実なスケッチとして」[9] 具体的に提供してくれる。と同時にその衰退過程についても教示してくれる。さて、19世紀前半のバークシャー地方といえばピューリタニズムの痕跡を残しながらも伝統的なイギリスの田園風景を保っていた。この地方の「『お祭り』は法令祭日でなくて、それよりもずっと古くから伝わる行事であった。それは今日確かめられる限りでは、文字通り奉献祭であった。すなわちそれは村の教会が公衆の礼拝のために開かれた日に、境内で始めて催されたものであって、それはまた守護聖徒祭の当日にも当っており、それ以後毎年、同じ日に催されて来たのである。」[1] このようにその由緒すらも正確にわからない『お祭り』が古くから伝統的娯楽を提供していたのであるが、その『お祭り』が果たしていた役割といえば、マーカムスンが指摘するようなことであった。[11] 作品にそってその役割を列挙すれば次のようなものであった。① 共同体的社会の確認の場、② 親族や家族の再結束の場、③ 個人間の不和の解決の場、④ 競技的娯楽における成功、そのことによる自己展示の場。こうした諸機能をもっていた『お祭り』は伝統的な共同体社会を維持していくうえで重要役割を果たしていたと言われる。そのためにも『お祭り』においては伝統的な民衆娯楽が盛大に行われていた。「笛や子太鼓、それにサーカスの入口で呼んでいる見せ物師のところから

聞こえてくる太鼓や尺八が大気にこだましている。このサーカスの戸口の上には中にはいったら見られるはずの珍奇な見せ物の絵が懸って人々の好奇心をそそっている。」[12] こうして『お祭り』では必ず見せ物小屋が設けられて民衆の好奇心をそそり、祭り気分を盛りたてたのである。また、「この田舎市のめまぐるしさ。私はレスリングのことも、袋にはいって跳躍競争をしている子供らのことも、目隠しの手押し車競争のことも、騎馬競争のことも、――」[13] それにこの地方独特の鈴試合とか、そして娯楽の花形であったレスリングや木刀試合が群衆の中で活発に展開されたのである。さて、こうした伝統的な民衆娯楽にもやがて変化がみられるようになってくる。「村の祝祭がこのごろどうなっているかは、多くの場合『パン種』の諸頁にみられる通りぢゃなかろうか。」[14] このようにこの地方においても産業革命期に入ると伝統的な民衆娯楽が崩壊の過程を歩みだしていくようになる。以下、少々長くなるがここはまさしくイギリスの時代的条件が伝統的な民衆娯楽の崩壊を進めていく原因となった具体的な描写と思われるのでかまわず引用してみる。「どうしてこうなったか、それは前にも申し上げた通り、良家のかたがたや農場主の連中が祭りに関係しなくなった、もしくは祭りに興味を寄せなくなったためなのです。彼らは懸賞の奉加帳に名を連ねなくなったし、催し物を見物に出掛けもしなくなったのです。―――― それが20年に亙る営利主義的経営と、それに伴う過重労働との結果として、階級間の疎隔がさらに甚だしくなったために外ならないとすれば、――」[15] かって、伝統的な民衆娯楽は狩猟好きの老農場主が熱心な後援者であった。しかし、その後援者もイギリスが産業社会に突入していくと、こうした伝統的な家父長制的社会体制とその温情主義を負担に感じるようになり、伝統的な民衆娯楽から手を引いていくようになる。そして、19世紀における「囲い込み」は伝統的な民衆娯楽が成り立つ場であったオープン・スペースさえも奪っていくようになるのである。こうした情況はもはやかってこの地方で伝統的な民衆娯楽が果していた共同体社会での役割をも失っていく結果にもなっていったと思われる。

「実は現在それが昔通りに行っていない理由は紳士や農場主の方々が外の娯楽に興味をもつようになり、例によって貧乏人のことなどに頓着しなくなったために外ならない。こういうかたがたはご自身で祝宴に参加せず、それをいかがわしい催しものだといい、そのため貧乏人のうちでも至極まじめな連中もそれを見限るようになり、祝宴はいう通りのいかがわしいものに成り終わったのである。」[16] さて、伝統的な民衆娯楽をいかがわしい催し物と見なすようになった原因には当時の福音主義運動(evangelical movement)と連動して鼓舞された レスペクタビリティーの崇拝熱が中流階級の間で展開されたこと、であろう。つまり、伝統的な民衆娯楽がもつ諸機能が『自助』の精神を道徳とみなしていた中流階級の価値観に合致しなくなってきたことがあげられよう。「『お祭り』の時代はもうすぎさったのだ。それは最早英国田園の休日の行楽の健全な正しい表現ではなくなったのだ。そしてわれわれは国民全体として、そういうものはもう卒業して、いま過渡期にさしかかっているのだ。――」[17] こうして伝統的な民衆娯楽にかわるものとして「巡回文庫やら、博物館やらその他さまざまな活動」[18] を通して中流階級の価値観に見合った娯楽が提供されてくるようになるのであるが、こうした家父長制的社会体制と温情主義との崩壊、それに中流階級によるレスペクタビリティーの崇拝熱は伝統的な民衆娯楽の崩壊を加速化させていく原因であったように思われる。

## 3. 民衆娯楽と福音主義

工業化社会にともなう行動パラダイムの変化はヴィクトリア朝社会を改革していくうえで重要な思考・行動様式として、その文化的基準にすらなっていったように思われる。この行動パラダイムの支えとなっていったのがピューリタンの再来とも言われた福音主義運動であったと思われる。この運動は中流階級間のレスペクタビリティー崇拝熱と連動するかたちであらゆる階級に浸透していき「改良の時代」といわれたヴィクトリア朝社会において、『自助』の精神を展開していくようになったと言われる。

こうした状況下で19世紀前半のチャーチスト運動による教訓は伝統的な民衆娯楽への統制を展開していくようになる。特に都市における定期市(Fair)にまつわる伝統的な民衆娯楽は統制される目標となっていったようだ。ここでは、C. Dickensの諸作品を通して工業化されていく社会の状況と伝統的な民衆娯楽との関係をみていく。「いまは、大きな工業都市の騒音、よごれと蒸気が、やせ細ったみじめさと飢えた物悲しい臭気を放って、彼らを四方八方とりかこみ希望を締め出し逃亡を不可能にしているような感じだった。」[13] 産業の発展によって都会が汚染されていく記述はC. Dickensの諸作品のいたるところに散在しているが勤勉、世俗的成功を理想とした中流階級の価値観はこうした状況をますます加速化させていった。「夜になると、すべてが奇妙な機械の立てる物音は暗闇でなおひどいものになり、その近くの人たちの様相はもっと荒々しく野生的になり、失業した労働者の群れが道路で示威行進をし、指導者のまわりにかがり火をもってい集し、指導者はそうした群集に激しい言葉で自分たちの受けた不当な仕打ちを知らせ、彼らに怒号とおどし文句を叫ばせていた。」[20] こうした労働者階級の悲惨な状況は、ギッシングによれば暖衣飽食の中流階級が社会的成長を遂げ、彼らの特質である執念深い現実主義が残虐なエゴイズムとなって現れだした結果であった。と同時に宗教的偽善と中流階級間のジェントルマン化の意識昂揚がこの時代を支配した結果でもあった、と指摘するのである。[21] 「事実、事実、事実、この町の物質的方面はすべて事実であった。マックチョーカムチャイルド学校もすべて事実であった。図案学校もすべて事実であった。主人と使用人との間もすべて事実であった。産科病院から墓地に至るまでの間のあらゆるものが事実であった。」[22] このように『自助』の精神、勤勉と忍耐の美徳によって支えられた自由競争の資本主義者たちにとって、その成功のためには労働者階級に対する統制策が必要になってくるのである。「外ならぬコートタウンに、町民の一団体組織があって、その会員の請願は、議会開会ごとに下院で聞かれたが、それはこういう労働者を是が非でも、宗教的にしなければならぬという議会の法令を請願(慨嘆しつつ)したものであった。次には禁酒会があって、かういふ労働者が泥酔した事実を統計表によって示したり、また茶話会の席で、人間の力でも、又神の力でも(禁酒会のメダルを除いては)、どんなことをしても彼らに泥酔する習慣をやめさせることが出来ないということを証明したりした。」[23] こうした泥酔の原因の一つが伝統的な民衆娯楽に直接結び付くものと考えていた福音主義運動者は、「改良の時代」にふさわしく無知で怠惰な労働者階級に対して禁酒運動を展開していくのである。では、ヴィクトリア朝社会をつぶさに観察していたC. Dickensはこうした状況をどのように捉えていただろうか。「コークタウンの労働者の生活に最も必要な要素が一つ、この何十年来、故意に度外視されてきたということを語られてもいい時機ではなかろうか。彼等のもつ幾分かの空想が病的にケイレンしてもがいている代わりに、健全に発せられることを要求していると語られてもいい時機ではなかろうか。丁度彼らが永い間、単調に働くのに比例して、何か肉体的慰安 —— 彼等を上機嫌にし、元気にして、彼等に思うさま気散じをさせるような何かの休息 —— もし彼らの心を躍らせるような、楽隊に調子を合わせて踊るような立派なダンスが出来ないなら、何か公認された祭日 —— に対する渇望が彼らの心の中に生長して来たということ、そういう渇望は充たされずには置かず、また、充たされるであろうが、若し充たされないときはきっとそこに何か狂いが出て来て、やがては世界の万物を支配する。」[24] C. Dickensの労働者階級に対する近親感は、貧困者の慰安娯楽を守ろうとする『ボズのスケッチ集』からも推察されるが、C. Dickens はいつでも大衆の娯楽、お祭りや見せ物といった労働者階級のあらゆる娯楽に対して好意的態度を示したと言われている。「—— 人間というものは、どうにかして娯楽を求めずには居られませんからね。旦那。」[25] 「人間は不断に働いていることも出来ず、また不断に勉強していることも出来ません。ですからわしどもをそうケイベツしてひどい目に合わせて下さらずに、少しはいい目も見せて下さい。勿論わしはこれまでずっと曲馬で飯を食って参りました。ですが旦那、わしが

あなたに向かってわしどもをひどい目にばかり合わせずにいい目も見せて下さいと申し上げるのは、この商売の哲学とやらを説明して上げている訳なんでございます。」[26] ここにおけるC. Dickensの言葉こそヴィクトリア朝社会に対す彼の批判的態度が集約されているように思われる，C. Dickens は『自助』の精神に対して批判的であり、こうしたことはC. Dickens の労働者階級の娯楽に対する態度でもあったろう。C.Dickensは『荒涼館』とか『ハード・タイム』にみられるように無法行為に対しては厳格な態度を示したり、またチャーチスト運動に対してもその暴徒的な側面に対しては批判的であったが、伝統的な民衆娯楽やその担い手であった労働者階級に対してはその代弁者であった、と言われている。

There is no master of the ceremonies in this artificial Eden —— all is primitive, unreserved, and unstudied. The dust is blinding, the heat insupportable, the companysomewhat noisy, and in the hightest spirits possible : the ladies, in the height of their innocent animation, dancing in the gentlemen's hats, and the gentlemen promenading " the gay and festive scence " in the ladies' bonnets, or with the more expensive ornaments of false noses, and low-crowned, tinder-box-looking hats : playing children's drums, and accompanied by ladies on the penny trumpet.[27]

C. Dickens は労働者階級の娯楽の権利と、彼らの自由な時間における自由な娯楽の追求の権利を擁護したと言われる。こうしたC. Dickensの態度は彼の初期の社会評論の中の " Sunday Under Three Heads "の中で展開されていく。

## 4. 民衆娯楽とC. Dickens

マーカムスンは伝統的な民衆娯楽の習慣が衰退していった大きな原因を労働者階級の秩序と中流階級間のレスペクタビリティー崇拝熱が連動していた福音主義運動であるとしている。この運動の関心は伝統的な民衆娯楽に対して常に相対するものであった。道徳というものは、常に群衆の中で誘惑されるものであり、しかも伝統的な民衆娯楽は大群衆と常に結び付いており福音主義者たちの不満はここにあったと言われている。[28] こうして、「改良の時代」における福音主義者たちは安息日の厳格な遵守を唱える一方で日曜日における伝統的な民衆娯楽の統制を行うようになってくるのである。こうして福音主義運動は19世紀イギリス社会に日曜日の規律の基準を設けるようになっていったと言われる。しかし、こうした状況に対して賛意を示す中流階級に対して、C. Dickens は必ずしも彼等が指摘するほど伝統的な民衆娯楽を無法なものとは考えていなかったようである。

They reach their places of destination, and the taverns are crowded ; but there is no drunkkenness or brawling, for the class of men who commit the enormity of making Sunday excursions, take their families with them : and this in itself would be a check upon them, even if they were inclined to dissipation, which they really are not. Boisterous their mirth may be, for they have all the excitement of feeling that fresh air and green fields can impart to the dwellers in crowded cities, but it is innocent and harmless. The glass is circulated, and the joke goes round ; but the one is free from excess, and the other from offence ; and nothing but good humour and hilarity prevail.[29]

このように、労働者階級の娯楽に対して賛意を示すC.Dickensは "Sunday Under Three Heads" の冒頭において労働者階級の娯楽の必要性を説きながら、彼らの娯楽こそかって歴史的にも奨励されてきたことであり、むしろ娯楽の必要性を認めない態度こそ非難されるべきであると指摘するのである。さて、伝統的な民衆娯楽の温情主義者と言われたC. Dickens がその娯楽を

見ようとロンドンの目抜き通りへと出かけていった。しかし、彼がそこでみたものは体裁ばかり気にかけている連中ばかりであった。労働者階級にとって伝統的な民衆娯楽こそ彼らにとって自己表現の手段と思っていたC. Dickens は外見的なレスペクタブル生活志向を批判しながらもそうした状況をみて自問するのである。

This maybe a very heinous and unbecoming degree of vanity, perhaps, and the money might possibly be applied to better uses ;it must not be forgotten, however, that it might very easily be devoted to worse ; and if two or three faces can be rendered happy and contended, by a trifling improvement of outward appearance, I cannot help thinking that the object is very cheaply purchased, ————[3]

C. Dickens は労働者階級が見栄のためにあたかも工場主や商人にみられるようなことまでして虚栄心をもつようなことを戒めるのである。それでもC. Dickensは娯楽を見たくてロンドン郊外へと出かけていった。

The labourers who now lounge awaythe day in idleness and intoxication, would be seen hurrying alond, with cheerful faces and clean attire, not to the close and smoky atmosphere of the public-house, but to the fresh and airy field. Fancy the pleasant scene. Throngs of people, pouring out from the lanes and alleys of the metropolis, to various places of common resort at some short distance from the town, to join in the refreshing sports and exercises of the day ——— the children gambolling in crowds upon the grass the mothers looking on and enjoying themselves the little game they seem only to direct ; other parties strolling along some pleasant walks, or reposing in the shade of the stately trees ; others again intent upon their different amusement. ——— The day would pass away, in a series of enjoyment which would awaken no painful reflections when night arrived ; for they would be calculated to bringwith them, only health and contentment.[31]

ところが、日曜日のあらゆる娯楽を禁止することを目的とした " Sabbath Observance Bill " が提案されると、C. Dickensは彼の宗教的立場からこの法案に対して批判的立場をとっていくのである。この法案の内容は "Lord's day"にあらゆる労働と娯楽を禁止するもので、違反者に対しては重い処罰で望むといったものであった 。

The proposed enactment of the bill are briefly these : —— All work is prohibited on the Lord's days, under heavy penalties, increasing with every repetition of the offence. There are penalties for keeping shop open —— penalties for drunkness ——— penalties for keeping open house of entertainment —— penalties for being present at any public meeting or assembly —— penalties for letting carriage, and penalties for hiring them —— penalties for travelling in steamboats, and penalties for taking passengers —— penalties on vessels commencing their voyage on Sunday —— penalties on the owners of cattle who suffer them to be driven on the Lord's day —— penalties on constable who refuse to act , and penalties for resisting them when they do.[32]

C. Dickens にしてみれば、こうした法案自体が些細なことのように思えたし、この禁止条項を守らせるために取り締まり役人は意のままに権力を振るったのであったが、C.Dickens はこの法案自体が偽善的かつ教導的内容のものであり、しかも強制的な方法で宗教心を養成しようとした試みが不合理であり、あまりにも教導主

義であると批判していく。そして、C. Dickensは伝統的な民衆娯楽を擁護する立場を明らかにしていく。この19世紀前半の日曜日における娯楽の基準を提案していったのは『自助』の精神を社会道徳とみなしていた中流階級であったと思われる。

the great majority of the people who make holiday on Sunday now, are industrious, orderly, and well-behaved person. It is not unreasonable to suppose that they would be no more inclined to an abuse of pleasure s provided for them, than they are to an abuse of the pleasures they provided for themselves ;[33]

今日、労働者階級が日曜日に何等かの娯楽を楽しもうとすれば、犯罪行為とみなされる。そうでなく、宗教的義務から開放された後はいかなる人をも自由にしてやるべきであり、とりわけ労働者階級の置かれた立場を考えれば、過酷な生活から少しでも開放してやるように努力すべきであり、福音主義者たちが試みようとしている合理的娯楽と民衆が本当に必要としている娯楽とは相いれないものなのだと指摘している。

Let divines set the example of true morality : preach it to their flocks in the morning and dismiss them to enjoy true rest in the afternoon ; and let them select for their text, and let Sunday legislators take for their motto, the words which fell from the lips of that Master, whose precept they misconstrue, and whose lessons they pervert ——— [34]

C. Dickens はまさしく伝統的な民衆娯楽を擁護する立場であった。つまり、安息日遵守法案に対するC.Dickensの態度は安息日こそ人のためにあるのであって、安息日のために民衆が犠牲になってはならない、ということであったと思われる。

## 5. 暫定的結語

19世紀イギリスにおける伝統的な民衆娯楽の衰退過程をC. Dickensの“ Sunday Under Three Heads ”を中心にその大雑把な追求を試みた。さて、イギリスにおける伝統的な民衆娯楽が「近代化」の条件を整えてくる過程、それは種々の条件が交雑していたように思われる。しかしこうした諸条件も要約してみるとヴィクトリア朝時代のジェントルマン化のエートスも中流階級のレスペクタビリティー崇拝に起因するものと思われるし、それを支えていたのが中流階級の道徳『自助』の精神であり、その根底には福音主義運動があったと思われる。こした社会条件から伝統的な民衆娯楽は中流階級の価値観に適合すべく修正されながら、あるものは近代スポーツへと形成されていったと思われる。カニングハムはこうした状況を中流階級による民衆娯楽の「取り込み」であったと指摘している。[35] 換言すれば、近代スポーツとは工業化社会における行動パラダイムに適合すべく修正されながら形成されてくるスポーツであったと思われる。本稿は伝統的な民衆娯楽の衰退過程が近代スポーツの形成過程であったという仮説のもとにその条件として福音主義運動がいかにそこに係わっていたかをみるために、C.Dickensの諸作品を手がかりとしてテーマへのアプローチを試みた。C.Dickensはこの厳格な宗教運動には批判的であったと言われている。また独善的傾向をもったピューリニズムに対しても批判的であったと言われている。宗教運動に対する彼の態度は、例えば『ピクウィック・クラブ』の中でメソジスト派の宗教的集会をとりあげて、そこでの偽善ぶりや禁酒協会のいかさまぶりを見事暴露してみせたり、[36]『ジョージ・シルヴァーマンの釈明』において宗教団体の醜悪さを見事に暴露してしてみせる。[37]しかしC. Dickensの宗教に対する態度は、“ Sunday Under Three Heads ”に集約されよう。ここにおいてC.Dickensが日曜日のあるゆる民衆娯楽を禁止しようと試みた“ Sabbath Observance Bill ”に対して臨んだ態度こそ、C.Dickensの宗教観であったと思われる。C. Dickensの“ Sunday Under Three Heads ”は彼の宗教観を理解する貴重な資料であるばかりか、ヴィクトリア朝時代の前半にかけて展開された伝統的な民衆娯楽の

衰退の原因が社会統制策としての結果であったことと、その背景として近代スポーツの形成過程において人間的ヒューマニズムの立場がいかに弱かったかを示唆してくれる貴重な資料でもあると思われる。

## 引用・参考文献

1. 小池　滋 訳 『チャールズ・ディケンズ論 P.6. 秀文インターナショナル. 1988.
2. 中村敏雄 『現代スポーツ論序説』 P.68. 大修館書店. 1977.
3. 村岡健次 『ヴィクトリア時代の政治と社会』 P.13. ミネルヴァ書房. 昭和56年.
4 .河合秀和 『ジョージ・オーウェル』P.64 . 岩波書店 1983.
5. R.W.Malcolmson, " Popular Recreation in English Society, 1700—1850 "P.56 Cambridge Univ Press. 1973.
6. 阿部生雄 『スポーツ教育』 P.51～52. 大修館書店. 1977.
7. T.W.Bamford, "Thomas Arnold on Education " P.30. Cambridge Univ Press . 1970.
8. C.Dickens, " Sunday Under Three Heads " Chapman & Hall. London. 1906.
9. 前川俊一 訳 『トム・ブラウンの学校生活』 P.53. 岩波書店. 1989.
10. Ibid., P.38.
11. Ibid., P.75～88.
12. Ibid., P.42.
13. Ibid., P.52.
14. Ibid., P.53～54.
15. Ibid., P.54.
16. Ibid., P.39.
17. Ibid., P.54.
18. Ibid., P.55.
19. 北川悌二 訳 『骨董屋』(下) P.103. ちくま文庫.1989.
20. Ibid., P.107.
21. Ibid., P.5.
22. 柳田　泉 訳 『ハード・タイム』 P.380 . 新潮社. 昭和3年.
23. Ibid., P.396.
24. Ibid., P.397～398.
25. Ibid., P.414～415.
26. Ibid., P.414～415.
27. C.Dickens, " Sketches by Boz " P.118. Oxford Univ Press. 1969.
28. Ibid., P.100.
29. Ibid., P.329.
30. Ibid., P.327.
31. Ibid., P.348.
32. Ibid., P.336.
33. Ibid., P.347.
34. Ibid., P.348.
35. H.Cunningham, "Leisure in the Industrial Revolution " P.114. St. Martin 's Press. New York. 1980.
36. 北川悌二 訳 『ピクウィック・クラブ』 P. 328. ちくま文庫.1990.
37. 小池　滋 訳 『ディケンズ短編集』 P.261 . 岩波文庫. 1989.

……

松村昌家訳 『ディンズの世界』 英宝社 昭和54年
小松原茂雄 『ディケンズの世界』 三笠書房 1989.
今井　宏訳 『イギリス史，2 』 みすず書房 1983.
川北　稔 『非労働時間の生活史』 リブロート. 1987.
中村賢二郎編 『都市の社会史』 ミネルヴァ書房. 1983.
石田憲次訳 『イギリスの社会小説』 研究社 昭和35年.

（受理　平成3年3月20日）